＜研究会報告＞

第44回　例会報告

1999年11月6日（土）に，本会の第44回例会が筑波大学学校教育部において行われた。例会で行われた溜池善裕氏の講演と，田尻信市氏の報告の要旨は以下の通りである。

社会科前史としての「調べる綴方」の視点

溜　池　善　裕*

生活綴方のうち「調べる綴方」は，戦前から社会科的な要素を含んだ実践の存在を示すもの，あるいは，その実践の枠組が既存の教科の枠組を超えていたという意味において社会科的であることを示すものとして位置付けられている。たしかに，これまでの研究もこの部分に注目して行われてきた。例えば，坂井俊樹（1988）は，北方教育運動における「調べる綴方」の中に，社会科的な要素があることを指摘し，谷口和也（1998）は，生活綴方や郷土教育運動の中に，社会認識教育の端緒を見出している。だが，これらは，既に教育実践史に関して海老原治善（1976）が示した実践のうち，「社会認識教育的なもの」を示し直すという域を出てはいない。有り体に言えば，「調べる綴方は社会科に似ているのだ」ということを「社会認識教育が行われていた」と語りなおしたにすぎないのではないか。

北方教育運動における「調べる綴方」は，確かに「社会に」関連するものを「調べる」という形をとっている。なぜ「社会に」関するものをなのかは，対象としている子どものほとんどが卒業後には実社会に出て行くという事情がある。綴り方教師の加藤周四郎も同様の事情をかかえる子ども達に「調べる綴方」を実践しているが，加藤は「調べる綴方」だけで子どもを指導したのではなく，物語の読み聞かせや，詩作などの指導に多くの時間を割いており，「調べる綴方」もそういった指導の積み重ねの結果生まれてきたものであることに留意すべきである。常識的に考えても，「調べる綴方」が確かに意味のある方法であったとしても，それのみで実践していたと考えるのは無理がある。それよりはむしろ「調べる綴方」が実践の一部を占めつつある種の役割を果たしたと見るべきである。

「調べる綴方」を万能とはしない加藤の実践のあり方と関連して，「調べる綴方」から離れていった綴り方教師についても注目する必要がある。例えば，近藤益雄や鈴木道太，そして村山俊太郎である。近藤は，加藤周四郎や滑川道夫に積極的に書簡を送りつつ，国語教育誌上に「調べる綴方」を毎年掲載するなどして，4年間にわたってそれを実践している。しかし後年，「調べる綴方」に疑問を抱き，「調べる綴方」から離れていくのである。近藤が「調べる綴方」から離れていく契機となったのは，「調べる綴方」は調べるという目的だけが先行し，その目的に振り回されて子どもが自分の生活を認識出来なくなるという矛盾に気付いたためである。近藤はむしろ，子どもが自分の生活を認識する核となる「魂」を作ることを土台としなければならないことに意義を見出し，詩の指導にその重点を移していったのである。調べる綴方において「論文学習」を提起した鈴木道太においても，自ら発表した論文学習を後に間違いだったと否定している。鈴木によれば，「優等生」においては「論文学習」は可能であるが，そうで

*宇都宮大学

ない子ども達においてはそれは意味をなさないというのである。村山俊太郎にしても，かつて調べる綴方を実践し「天神様のお祭り」は代表的な実践となったが，後年それを自己批判することになる。その批判に見いだされるのは，子どもの感情，意欲の在り方，およびそれの必然する綴方的方法技術という視点が，調べる綴方には欠落しているという指摘である。

「調べる綴方」は，ある種の時代状況においてそうせざるを得なかったという事情にのみに依拠する。その事情とは，生活レベルや能力の違いに関係することなく，生活を認識させることによって，どの子どもも社会の中で生きていく素地を作らなければならなかったということである。「調べる綴方」は「論文学習」のような社会認識教育の色彩が濃くなると，能力のすぐれた子どもに指導の力点が傾き，結果，本来の目的から乖離した指導となっていった。「調べる綴方」はそういったある種の限界をもって実践されたのであり，その意味では，社会認識教育として位置づけることは，「調べる綴方」の本質からはずれることになる。

社会科教育研究においては，「調べる綴方」の指導において見出された，社会認識のための教育にはいきつかない限界を社会科教育としてどのように考えるかをこそ問題にすべきである。教育課程の改訂によって，体験や経験を重視するという経験主義的な教育方法が生活科や総合的な学習の時間において導入されるばかりでなく，それらによって社会科の内容が浸食されつつあり，その意味で，社会科は混迷の時期にある。だからこそまた，社会科教育研究における社会科前史の研究は，我田引水的，盲目的な社会科礼賛のための証拠収集をやめて，社会科に近似する教育方法がどのような矛盾と問題点をもっていたのかを率直に認めつつ，将来の社会科教育に資することを目指さなければならないのではないか。

絵画史料を用いた高校世界史の授業

—W．ホガース作『当世風結婚』から近代世界の構造を読み解く—

田　尻　信　市*

近年の歴史教育は、知識・理解を重視する注入型の講義から思考力・判断力を重視する問題解決型の授業への転換が叫ばれている。後者の場合、討論やロールプレイなどを授業に積極的に取り入れる動きがある。新しい教育方法の試みのなかで、報告者が強い関心と共感を抱いているのは、絵画史料を用いた授業である。日本史学習では、宮原武夫、加藤公明らによって絵画史料を用いた授業方法の理論化と優れた授業実践が行われている。しかし世界史学習では、絵画史料を用いた授業実践はまだ少なく未開拓の分野である。

本報告は、英人画家W・ホガース（1697～1764年）の『当世風結婚』第4画「伯爵夫人の接見」を主な教材として行った授業実践である。ホガースの活躍した時代は中産層が社会や経済の分野への進出の第一歩を踏み出した時期であり、彼は中産層の価値観を代弁する画家であった。また、その作品は18世紀の英国社会を理解する上で文献史料に劣らぬ貴重な史料として今日高く評価されている。とくに『当世風結婚』は当時の落ちぶれ貴族の財産目当ての政略結婚を風刺しており、上流階級を形成した貴族階級と海外貿易や投資で富を築いた商人階級や黒人召使いが登場する。そこには当時の貴族や商人の服装、物腰、習慣から家具調度や絵画などの室内装飾品に至るまでが実に詳細に描写されている。

授業では、D・ダビディーン著『大英帝国の階級・人種・性』（同文館、1992年）の図像分析の方法に依拠して『当世風結婚』第4画を生徒に分析させ、18世紀中頃の英国社会の特徴を考察させた。そして、この考察を通じて、黒人奴隷やカリブ海域産の砂糖、チョコレート、インド産のキャラコが流入し、生活革命と呼ばれる一大変化をもたらしたことを生徒に理解させ、近代世界の特質を構造的に捉えさせることを目指した。

*筑波大学附属高校